

昨年の史學地理學界

史學界

史學一般 昨年度に於ける此方面の論著は殊に寂寥の感あるを覺えしめこれを其前年に比するに其問題並に其主張に於て著しく活潑を缺けるを思はしむ。其中に於て近時泰西名著の翻譯の企圖せらるゝもの少からざるに際し、史學の領域に於ても亦其著作の翻譯紹介せらるゝものあるは寧ろ此方面に於て悦ぶべきものあり。最近ラムプレヒト氏 *Adolphe Giesche'schichtswissenschaft* が「近代歴史學」として利辻哲郎氏により邦譯され世に出でたるは特記に値すべし。我國に於ける文化史研究に於てラムプレヒト氏の名の屢々論議せらるゝものありしと雖未だ其思想を詳細傳ふるもの出でず偶々先年「心理研究」誌上に其一部の掲載を見しも中絶するに至りしに今其全譯を見るを得殊に近來西南獨逸派の史學論喧くして方に風靡の觀あるを、此の衆府學徒の主張を廣く傳へて靜かに其の考覈に資せんとするは、是れ其の貢獻の大なるものありと謂ふべし。又ロビンソン氏の *The New History* 中の一篇、史學の歴史を論ぜるもの、新史學（小林孤村、國學院雜誌）として紹介せられたるも亦注意すべきものなり。而して一般方法論に於てはデカートの「方法論省察」（出隆譯）の出づるあり。又唯物史觀の祖廣マルクスの「資本論」の翻譯亦刊行せるものあるは史學一般考察の攻

究上多幸なるものたるを失はず。尙マルクス唯物史觀に就いては「マルクス唯物史觀に關する一考察」（河上肇、經濟論叢）あり、この唯物史觀が必然論を根據とするの故を以て反對の論難を招くものありと雖これ意義なき所にして却つてこの社會主義的經濟學派に對立する正統派の經濟學に於ても亦必然論の上にその根據を有するものにして、スミスの利己心、或はマルサスの人間性、何れがマルクスの唯物史觀の必然論を排するを得んやを説けるもの、又「マルクスの唯物史觀に所謂生産の意義」（河上肇、同誌）はマルクスの唯物史觀が社會の生産力によつて生産方法、生産關係、經濟組織、法制上政治上組織、精神的文化をも相次で必要的に變動せしむるを説くも、この生産力なる歴史の元的動力に於て言ふ生産なるもの、意義甚だ不明瞭なるを以てこれを論じたるものにして、マルクス及び其祖述者エンゲルスの言ふ所によつて生産の意義を闡明限定せんしたるものなり。又史學に關する認識論上の研究にては「個體觀念」（西川幾多郎、史林）あり、個體觀念を一般概念を論じて個體概念に基く精神科學に於ては比較或は分析によつて個體知識が明にし得らるゝやを疑ひ別に全體の直觀より出發する綜合的觀方の存在する事其藝術學と同じく創造的想像の力を要するものにして、精神科學なるもの、中に於て此くの如きも

の、あり得るを信ずるにせり。歴史哲學に於ては「カントの歴史哲學」(米田庄太郎、哲學研究)あり、未だ完結せざるも、カントの歴史哲學の方法、問題を社會學より批判し社會學發達に其れが貢獻する點を論じ、カントの批判哲學と其歴史哲學的思想の發展との關係を論ぜり。尙他に歴史の理論的研究(橋川正、歴史と地理)あり、歴史の理論的研究に於て、ヘーゲル哲學の史觀を論じたるものなり。其他シカゴ大學に於ける歴史批判學について(松本彦次郎、史林)は米國シカゴ大學に於ける史學研究法の研究、トムソン教授の講義及び研究法に關して記述し「獨逸戰時史學の一面」(大類伸、史學雜誌)は最近獨逸史學の傾向と現狀を略叙して戰爭の影響を説けるもの又教授法に關しては、「歴史教授の目的」(齋藤斐章、歴史と地理)あり、中等教育に於ける歴史教育の目的を論ぜるものなり。(西田)

國史 昨年に於ける國史界は之を前年に比して敢て大なる進歩をなしたりとは云ふべからざるも、其研究が堅實に著々其歩を進めつつあることを認むるは斯界の慶事と謂はざるべからず。而して昨年の國史界に於て特に吾人の注意を惹きしは物價騰貴の影響を受けて圖書の出版少かりし事、學者が從來一度發表したる研究論文を整理して出版するもの比較的多かりし事、僅々半歳の間に西洋史の大家著作博士と共に入田、田中二博士を失ひし事これなり。次に昨年の國史界の概要を紹介するに當りて吾人は先づ單行の著書より始めんに、「神道沿革史論」(清原貞雄)は神道の沿革を純客觀の見地より叙述したるものにして就中第三編神儒佛混淆期の研究は著者の最も苦心せし所なるべし。「法制史の研究」(三浦

周行)は著者が過去廿五年間の法制史の研究に關する業績を選択し編次を立てたるものにして千二百頁の大冊なり、本書は固より一個の系統的叙述にあらざるも其中に含まる、各編は既に定評あり、日本法制史として他に匹敵を見ざるものなり。「近世の日本」(内田銀藏)は著者の大阪懷德堂講演筆記を修訂したるものにして江戸開府より幕府衰亡に至る首尾一貫せる近世史論なれば、著者の年來企圖せる日本近世史の骨子とも謂ふべきもの、學界最近の研究を網羅せるのみならず、到る處著者の見解を收め、別に附録として近世史に關する論文六篇を添ふ。「豐太閤と其家族」(渡邊世祐)は太閤の豪華なる生涯の裏面に於ける家庭生活を述べ其の教育の生涯を説きたるもの。「元祿時代觀」(中村孝也)は元祿時代の歷史上に於ける地位、幕府政治の確立、階級制度の理想、町人階級の勃興より旗本奴、町奴、江戸大阪の發達、其他貨幣文藝貿易等に就て叙述し趣味に富める讀物なり「日本佛教史之研究」(辻善之助)は既に發表せる舊稿十六篇に新に國分寺考、安國寺利生塔考の二篇を加へて出版したるものにして最も著者得意の壇場なるべし。「古事記及び日本書紀の新研究」(津田左右吉)は記紀の一般的性質を論じ神武天皇以後仲哀天皇以前の部分に就いて其記事内容に新解釋を試みたるものなり。「諺に關する疑」(穂積陳重)は諺の習俗が我國有の風習にあらずとする先人の諸説に疑義ありとし、實名を尊んで之を避くる習俗は人類普通の現象にして低級文化民族殊に太平洋諸島及沿岸地方の民族中に最も盛に行はるゝが故に我國にも固より此風習存せるなるべしと主張せり。「神祇史綱要」(宮地直二)は著者が昨年四月東京文科大学の公開講義の手

記に修正を加へたるものにして神祇史の意義以下江戸時代までの神祇に關する事項の發生、消長、隆夷を政治上の事情と社會文化の發展とより講述したり。又「標津郷土史論」は神戸に於ける日本歴史地理學會の夏期講演を收めたるものにして諸家のこの地方に關する考説を見るべし「長崎縣人物傳」(長崎縣教育會)は長崎縣教育會が、今上陛下御即位記念事業として福田忠昭、梁田忠山氏等を編纂委員として編輯せるものにして長崎縣に關係深き人々約八百名の人物を傳せるもの、獨り本邦人のみならず、シーボルト郷成功の如き長崎に縁故ある外國人にも及び、附録として舊藩主略系、長崎奉行世代表、縣市郡略史等をも收めたり。又而して徳川時代の儒者に關しては「細井平洲」「高瀬代次郎」「家田大峰」(同人)「鹽田楓江」(明石吉五郎)等あり。

政治制度、史方面に於ては「日本國號に就て」(後藤蕭堂、歴史と地理)は日本國號に關する從來の諸説を批判し、日本の國號は魏志東夷傳に見ゆる「近日出所」より出づることにして、「日本國號の出所に就て」(同人、民族と歴史)は其の梗概と見るべきものなり。「神代史の研究法」(津田左右吉、歴史と地理)は神代史に對する從來の研究法に慥らずとなし、神話傳説に實際上の事實を求むるよりは之を傳へたる上代人の心理上の事實と、其心理發生の原因、及先史時代の風習及社會狀態を知りて傳説の精神を理解すべき事等を主張し、「言語の研究と古代史の研究」(新村出、民族と歴史)は言語にて古代史に關する事項を捉へ双方の語源的解釋をなす場合には如何なる注意を要するかを説き、「言語の研究より見たる日本古代の家族制度」(金澤庄三郎、歴史と地理)は家族

に關する言語を朝鮮、印度、ゲルマン其他の民族の言語と比較して我國上代の家族が一夫多妻なりしこと、魏歌又は歌垣は掠奪結婚の遺風と思はるゝこと等を述べ、「天皇の御證號」(山本八三、同誌)は證號を國風證と漢風證、彰德號、院號、加後號、年代號等に分ちてこれを説明し、「中天皇に就いて」(喜田貞吉、藝文)は河内野中寺の小金銅佛像銘にある「中宮天皇」なる句によりて中天皇、仲天皇、又は中津天皇とは中宮天皇の義にして、先帝の皇后の皇位を踐み給ひし御方を申すことを論ず、「皇后宮と中宮との御稱號に就いて」(同人、歴史地理)は中宮とは三后の總稱、皇后とは三后中特に當今天皇の御嫡后の稱なりしが、後に官衛の名に呼ばるゝに至り殊に天子兩嫡后を有し給ふに至りて中宮と皇后宮との稱號の用法に相違を生じたるも、要するに兩者共至尊の御配偶者にして尊敬の度に於て輕重なきことを注意し、「御名代、御子代考」(同人、同誌)は穗積博士の「諱に關する疑」に於て我上古の御子代御名代が實名敬避の俗に反せずと論駁せるに對して反駁せるもの、「御成年式に就て」(池邊義象、國學院雜誌)は東宮御成年式の由來、式の概要及び古の御元服に就て述べしものなり。法制史にては「法制の史的 연구」(吳文炳、歴史地理)は我國の法制史の研究が從來多く法の外形の研究即ち法規の文理解釋が若くは論理的解釋にして其背景たる國民生活とは沒交渉的のものなりし事を指摘し、法制の分類もとより可ならざるにあらずと雖も綜合的、社會心理的研究の更に必要なるを力説し又支那法系の大寶令と共に日本系の式目研究の二方面より進むべきことを論じ、「大寶令の施行及破棄」(赤堀又次郎、同誌)は吳氏の不用意に乗じ大寶

破棄の語は使用せられずとも其の事實も明文も存することを教へたるもの、「守護制度の研究」(三浦周行、史學雜誌)は從來の研究に閉却せられ著しくは相一致せる點に就て新研究を發表したるものにして守護の權限は貞永式目に所謂大犯三箇條なるも實際は既に頼朝の時より三箇條以外に涉りしことを指摘して大犯三箇條の意義を述べ、守護の得分に就ては星野、黒板兩博士の説に反對して其の得分ありしことを主張し、最後に鎌倉室町兩時代の守護の異同を比較論せり。「憲法十七條の性質及價值」(同人法學論叢)は聖德太子の憲法十七條を形式上と實體上の兩方面より觀察し、其法理を究め、之を生みし時代に考へ修身書説を排して我が古代法の法源なりと斷定し、此法の影響する所大なりしことに言及し、「武田家の法律、甲州法度の研究」(同人、同誌)は所謂信玄家法の性質に就て一言したる後、上卷五十七條に現はれたる社會組織、行政組織を觀察し、各階級の者に對する條文及租税、債權債務、官吏の職務等に關する條文に就て説明し、其貞永式目の影響を受ける所多きも而も立法の精神に於て異なること、信玄が士民の言略を聞くに吝ならざりし點に及べり。昨年は帝國憲法制定後三十一年に相當したるが故に帝國憲法に關する論文多く發表せられたるが中に「憲法制定懷舊談」(金子堅太郎、國學院雜誌)は伊藤公の下に帝國憲法起草の任に當り又樞密院の憲法制定會議に列席して其發布迄少からざる勳勞ありし著者の實歴談なれば最も傾聴すべく、「日本憲法制定史談」(藤井甚太郎、歷史地理)は日本憲法の由來を説くに當り王政復古前に於て公議輿論の政體は如何に議論せられしか、又之の政體を確立すべき時勢は如何にして馴致

せられしかを説明し、この公議輿論尊重の思想が漸次表面に現はれて五ヶ條の御誓文となり更に帝國憲法となりし次第を叙述したるものにして一種の幕末維新史を背景とする憲法制定史と見るべし。「後醍醐天皇の吉野御遷幸に就て」(中岡清一、歷史地理)は天皇の吉野遷幸に關して其議を奉りし人、遷幸の理由、遷幸の時日及狀況等に就て記述したるもの、「楠氏と勤王論」(本多辰次郎、同誌)は楠氏の純忠至誠の事蹟が一度太平記々者に依りて叙述せらるゝや後世之を讀む者孰れも感激して勤王排幕の主義を生みたるが、而も此等楠木、新田等の勤王家に對する思想は變化ありて對人的なりしもの、後次第に精神的道德觀念と變じて爰に始めて洗練せられたる純正無垢の勤王論となりし徑路を説く「正平七年の男山八幡戰爭」(八代國治、歷史地理)は正平七年京都戰爭前後の形勢、八幡戰爭の地形と筑城の原因及戰鬪の經過を詳述し、後村上天皇が戦利あらずして遂に國を突破して賀名生に還御せられたる次第に及ぶ、「土一揆」(三浦周行、史林)は室町時代の社會問題たる土民階級の一揆運動に關する研究にして、先づ其代表的なる正長、嘉吉の一揆によりて當時の一揆が如何なるものなりしかの概念を與へ、次で土一揆と土倉一揆の發達、一揆の兵力、時代の傾向、土一揆と内裏寺に分ちて詳細に論述せり。同種の研究には又「一揆の觀念」(本庄榮次郎、經濟論叢)あり、一揆なる詞の變遷と土一揆、一向一揆、百姓一揆等の性質に就ての發表にして前者と共に大正七年の米騒動事件と古今相對照して殊に興味あるを覺ゆ。「足利時代の徳政」(三浦周行、國民經濟雜誌)は、徳政の起源、幕府の徳政、領主の徳政徳政令實施の影響の四章に分ち、

主として徳政令を彼れ是れ比較對照し債權債務の關係が前後の徳政令によりて如何に規定せられ、如何に變化せしか、或は如何なる動機によつて此規定ありしや等を詳細に研究し、徳政の實施が如何に長く深刻なる影響を經濟界に殘したるかを叙述せるものなり「小牧山陣と世界戦」(同人、歴史と地理)は今回歐洲戰場に於ける獨逸の戦法が所謂内線的戰術を多く用ゐたるを、獨逸が世界の同情を失ひて孤立の地位に陥り遂に戰敗國となりし點を以て之を我國史に於ては天正十二年の小牧山陣に比すべきものなりとして、最近の發見に係る豊臣秀吉の書狀によりて同陣に關する從來の史實の誤を正し、兩軍の戰略、秀吉對信雄、家康の關係を觀察したるもの、「徳川氏の姓氏に就て」(渡邊世祐、史學雜誌)は徳川氏が清和源氏の嫡流、新田氏の後裔と稱するを疑ひ、近衛前久の書狀其他の史料に據りて、松平氏は初め三河の土豪にして傳ふべき程の姓氏あるものにはあらざりしが、家康漸く勢力を得るに及び叙爵の必要より藤原氏を稱し又將軍となる爲めに源氏となり清和源氏の嫡流と號するに至りし徑路を叙説し從來の研究に一步を進め「江戸時代に於ける階級制度と文化の様式」(中村孝也、同誌)は文化の様式を分類し、江戸時代の階級を分ち、此の文化の様式と階級制度との間に存する相互關係を觀察し、武家が社會上に優越なる地位を占むる所以の根據を論じたるものなり、「元治元年參勤交代及妻子在府制の復舊事情」(原傳藏、歴史地理)は幕府が元治元年文久二年の令を廢して諸侯の參勤交代及妻子在府制の復舊を令せしは同年七月蛤門の變ありて長州藩が朝敵の汚名を蒙り防長二州に盤居し京都にては公武合體の全盛を見るに至りしを以て幕

府の保守派が此の好機に乘り幕權を回復せんと企てたるによるものにして其失敗に終りしは主として京都の干渉に基くと言き「松平定信の開國に就きて」(上野菊雨、同誌)は定信が大勢を洞察して露西亞に長崎を開かんその意志ありし事より其の國防、開拓思想に論及し定信が決して頑固なる非蛙の目に非ざりしを説き、「江戸時代の開國思想に就て」(同人、同誌)は江戸時代の開國思想は、第一歐洲諸國の影響を受けざる以前の經濟思想に基き新に國土を開拓するの意味より第二歐洲の影響を受けたる經濟思想と且つ露英の刺戟を受けたる國防思想の合體に依り國土を開拓せんとするものに移り、第三單に開港のみを指すに至りし事を論じ、「林子平處罰論」(同人、同誌)は松平定信の政策を説きて子平の處罰原因を定信の保守主義、古松軒入説、子平の性格に歸せり。民政に關する問題には「武田氏治水事業の一斑」(琴陵重鑑、同誌)あり、武田氏の治水事業、就中甲斐國龍王村山神郷及分國信濃國小河、牛牧兩郷の治水事業と信玄堤の事を説き、武田氏が民政に深き注意を拂ひし事を推賞し、「舊出羽庄内藩川口郷民政の實況」(常葉金太郎、同誌)は川口郷の政治機關、年貢、鄉藏等の民政の實況を古老の直語に基き傍ら其他の材料を以て補説せり「薩藩の琉球統治策」(武藤長平、歴史と地理)は薩藩が慶長十四年琉球を附庸として以來之を懷柔することに努めたる半面には檢地を行つて地租徴收の基礎を定め、又物産稅、船稅等を支配し、或は支那に隸屬するを利用して貿易の利を收め、且大陸の文化を吸收することゝ怠らざりし事及其同化策等に就て述べ「酒井忠勝の民政」(牧野信之助、同誌)は玉露叢、仰景錄、空印樓御書並御仕置之寫

書下集等の史料に據りて忠實の農政、土木、植樹産業の奨励、町家の發達、刑律等に就て叙し、「加藤清正木像及び肥後に於ける治水遺業」(小林庄三郎、歴史地理)は清正の生前に彫刻せしめたる彼れの木像が熊本市外本妙寺永運閣より發見せられたるを報じ、併せて清正の菊池川下游瀬畔以下の治水遺業を紹介し治民の功績を述べたるもの、「近世まで保存せられたる家人奴婢制度」(喜田貞吉、民族と歴史)は阿波に於て徳川時代の末まで行はれたる下人(大體古の奴婢に當る)と其の解放されたるものなる小家(大體古の家人に當る)の制を述べたり。

經濟史の方面にては「播州三木町に於ける職業組合」(松本彦次郎、史學雜誌)は町有文書等によりて戰國時代より發達せる鍛冶を中心として同町の職業組合に就て研究の一部を發表し「割地の發生並に發達についての考察」(牧野信之助、經濟論叢)は割地の發生を江戸時代以前に求め、檢地とその高割付に由來するものとし、その制度の漸次發達せる徑路を主として著者が越前國に於て探訪せる史料に據りて述べ、「兵庫兩關稅務の研究」(栢原昌三、史學雜誌)は兵庫の南北兩關に關し、關稅の性質、兩關稅の組織分掌關稅の收入支出、關稅賦課方法其他に就て研究し、「一種の富豪稅」(三浦周行、經濟論叢)は江戸時代の獻金御用金より廻りて室町時代の土倉酒屋の課役、有德錢、矢錢、判錢の制を説き、之を以て一種の富豪稅なりとせるものなり、「徳川時代の米穀消費節約策」(本庄榮治郎、同誌)は消費節約の政策の行はる、場合には、米價騰貴、飢饉、凶歉等の如き一時的因に因るものと、永續的理由によるものと二あることを述べ、其方法を説き代用食物に

言及せるものにて現下の社會問題解決の參考となるもの尠からず「明治の米價調節」(同人、同誌)は明治時代の米價調節につき四の時期に分ち、其意義、米價の高低、調節の方法及び効果等を分説し、最後に總括的概観を述べたるもの、「備前藩に於ける填海墾田」(橋村博、歴史地理)は備前藩の新田開墾事業殊に池田光政入部以來の填海墾田に就て叙述し、「加賀藩に於ける贖野の開墾」(同人、同誌)は前田氏が其領内に於て利家以來歴代農政に意を用ひ贖野を開拓して米の產額を増加したる次第を年代を追うて叙述したるもの、「問屋の發達」(桑原親通、歴史と地理)は奈良平安朝より江戸時代まで四期に區分して問屋の名稱、所在、營業等の變遷發達を研究したるものなり、「明治初年に於ける富豪稅に關する評論」(原傳藏、歴史地理)は明治二年三月公議所に於て富豪稅問題の討論せられたる時各議員の評論を紹介し、「本邦原始の織布工業」(栗野秀穂、歴史と地理)は倭文布の音訓及意義、用途、起源倭文布部の設置、倭文布部民の分布等に就て述べ、「伊賀に於ける王朝時代の東大寺領」(谷森健男、史學雜誌)は伊賀國に在る東大寺領の所在地、寺領と成りし原因、封戸、平安初期の東大寺領、諸庄の成行、所當等に就て研究せしものなり。次に對外史の方面を見るに、「蒙古襲來に關する諸研究に就いて」(大森金五郎、歴史地理)は伏敵編以後蒙古襲來に關する新史料の發見せられたるもの、及び中山平次郎氏の研究等を紹介し併せて著者の意見を加へたるもの、「元寇覆滅の後代に及ぼし影響」(後藤肅堂國學院雜誌)は元寇覆滅に關する支那南北人の感じの相違を説きてて日明交通及倭寇に論及し、「大内義弘と朝鮮との關係に就て」(瀬野馬熊、史學

雜誌)は大内義弘の朝鮮交通と九州探題今川了俊との關係を説き義弘が應永六年泉州堺に戰死する迄四年間に六回も使者を派遣したる顛末を叙し、「倭寇とバハン船及寶船」(長沼賢海、同誌)はバハン船の名稱は八幡船に起り支那人の命名なりと云ふ舊説を疑ひバハンは安南の俗語海倫(海賊の意、音バカン)より起りバカンがバハンに轉訛せしものならんとの新説を提出し、「海國民としての倭寇」(後藤蕭堂、歴史と地理)は上古に於ける倭人の渡韓及渡漢の事蹟を叙し、其目的は通商にありと、後世の倭寇の前身と看做し、倭人の文化程度に言及せしもの、「足利義持の對明交渉」(辻善之助、同誌)は義持が應永十三年(明の宣德元年)遣使入貢せりといふ海國編の説を排して義持が從來の説の如く明と交渉を絶ちたる事を闡明せしに對し、「辻博士の足利義持對明交通に就て」(後藤蕭堂、同誌)は前者の結論には賛成なるも立論の過程に異議ありと云ひ、「淺野幸長岡山籠城に關する史料に就て」(渡邊世祐、歴史と地理)は件の史料に就て説明を試みたるもの、「鳥原の亂と蘭人」(山鹿誠之助、歴史と地理)は和蘭商館長の書翰と蘭人の日記とによりて蘭人の幕軍を應援したる狀況と亂後蘭人が平戸より長崎に移轉するに至りし次第を叙述し、「太平洋問題に於ける竹島の回顧」(柏原昌三、同誌)は竹島即鬱陵島の所屬問題及び其の利用問題を研究したるものなり、「幕末に於ける帝國膨張の思想」(魚澄總五郎、同誌)は幕末の國防論攘夷論より開國進取論に言及し、「太平洋捕鯨事業と日本の開國」(新村出、同誌)は我國及西洋に於ける捕鯨事業の沿革及兩者の關係を述べ十九世紀中葉英米の太平洋に於ける捕鯨業の發達、殊に米國の捕鯨船保護の必要より日本

の開國を促すに至りし次第を畧叙せり。更に外人側の史料に依りて我が對外史を明にしたるものには上に述べたる山鹿氏の論文の外「フエアーヘヴン町と中濱萬次郎」(齋藤文藏、歴史地理)及び「英佛人の觀たる生麥事件」(同人、同誌)あり、前者は一九一八年七月五日發行の米國のフエアーヘヴン・スターに載せられたる土佐の漂流者中濱萬次郎の物語の全譯にして後者はボーター氏外數名の著書及新聞記事中生麥事件に關する部分を譯したるもの、在留外人間及英米國に起りし議論、英國の行動、事件の推移等を知らるべし、「樺太問題に關するムラビヨフアムルスキ伯爵簡」(堀竹雄、同誌)も亦貴重なる史料と云ふべきなり、「韓國併合事情」(小松綠、史料)は著者が親しく其事に關與して見聞したる韓國併合の裏面の事情にして事の真相を知るに足るゝ共に當局苦心の狀を察すべし。更に視界を韓じて史料に關するものを觀るに關係論文頗る多數に上り一々紹介の違なし、仍つて吾人の注意に上りたる主なるものゝみに止めん、に「光格天皇より後櫻町上皇への御書に就いて」(三上參次、史學雜誌)は著者が大正七年一月の御講書知に進講したる時の手控にして光格天皇より後櫻町上皇に上られたる御消息につき其由來及内容を述べ以て、寛政聖天子の仁德高き名君にして且つ御孝道深かりし事を説明し奉れるもの「高岳親王の御事蹟に關する一二の研究」(橋本進吉、同誌)は高岳親王の御法名は初め眞忠と申し後眞如と改め更に入唐後遍明と稱せられしことを考證し御在唐中の逸事二三を叙し、「光格天皇の御生母に就て」(辻善之助、國學院雜誌)は天皇の御生母磐代の素性、宮仕の始末、御性格等に就て述べ、「應永九年舉兵會津」(高田宮)について

（花見朝巳、歴史地理）は會津塔寺八幡宮の長帳に記さる、高田宮の舉兵は南朝皇胤にあらずして會津高田町に鎮座せる伊佐須美神社の祠宮渡邊氏の事なるべしと推測したるが、此の推測は「花見學士」の「會津高田宮」を讀みて」（菊池研介、同誌）によりて裏書せられたるが如し、「局務の大器明經の名士清原頼業」（龍嶺、同誌）は一代の學者清原頼業の略歴、藤原頼長との關係、平氏專權時代に於ける頼業の活動、藤原兼實との關係等を説明したるものなり昨年（源實朝）の薨後七百年に相當したるにより實朝に關する論文頗る多かりき、即ち「歴史地理」には「源實朝の生涯」（大森金五郎）「政治家としての源實朝」（三浦周行）「歌人としての源實朝」（武島羽衣）「源實朝の宗教信仰及び渡宋計畫」（鷺尾順敬）「時代の犧牲者源實朝」（黒板勝美）「劇の主人公としての實朝」（松本彦次郎）等あり、其他鎌倉時代の社會藝術としての源實朝の歌（同人、歴史と地理）、「右大臣實朝公」（八代國治、國學院雜誌）等併せ看るべし。而して「阿波局」（和田英松、歴史地理）は北條時政の女、頼朝の弟阿野全成の妻阿波局が實朝の乳母として常に營中にありて實朝の利益のために秘謀をめぐらしたることを述べたり「宮川尙古事蹟」（伊東尾四郎、同誌）は兵法學者宮川忍齋の筑後筑前に於ける事蹟を叙し、「千種忠顯卿」（三浦周行、歴史と地理）は卿が後醍醐天皇に近侍して終始南朝のために刻苦勵精したる事蹟を闡明し、「楠木正儀」（中村直勝、同誌）は正儀の事蹟を叙説し、「山陽中齋及雲桂」（高瀬武次郎、藝文）は頼山陽、大塩中齋より京都の醫家秋吉雲桂に贈りし書狀及詩文によりて三人の人物及親交の狀を叙述し、「法然上人と聖フランシス」（原勝耶、同誌）は日本宗

教史上に法然の出現の形勢と法然に於て認めらる一種の矛盾を指摘し聖フランシスを對比して宗教革新運動の先達法然を論評したるもの「豐太閤と大政所」（渡邊世祐、明治聖德記念學會紀要）は豐太閤の大政所に對する情緒極めて厚く大政所の爲め病氣平癒の諸社祈願、天瑞寺の建立、青巖寺、東寺大塔の供養、四天王寺の再興ありしを述べ、「豐太閤の文藝」（同人、史料）は豐太閤の和歌、茶道、能藝等の諸藝能を修得したりし由來程度を研究して、豐太閤は世に傳へらるゝが如くしかく無學文盲の人に非ざりしを明にし、「武田信玄の信仰及び文藝」（同人、史料雜誌）は信玄の信仰篤かりし事を幾多の文書によりて證明し、又學問もあり詩歌書畫の趣味も豊にして優に戰國時代第一の政治家なりと推獎せり、「林道春及松永貞徳と耶蘇會者不干ハビアン」（新村出、歴史と地理）は慶長十二年林羅山が弟信澄と共に頑遊なる者の紹介にて耶蘇會者不干ハビンを訪問したる事に付き頑遊は俳諧師松永貞徳にして羅山と交際ありし事、不干は妙貞問答書の著者、ハビンにして、もと禪僧あがりのイルマンなる事を明にし、羅山と不干との問答及貞徳と耶蘇徒との關係等につき前人の未だ注意せざりし方面を明にし、「林良齋」（高瀬武次郎、同誌）は讃岐・多度津藩の陽明學者林久中の略傳、春日潜庵及大塩中齋との關係等を説き、「行信僧都の事蹟に就て」（日下無倫、無盡燈）は行信なる名は元興寺、法隆寺、藥師寺にありて三人同人説、二人同人説等あるも著者は元興寺行信と法隆寺行信とを同一人とし、法隆寺行信と藥師寺行信とは別人なることを主張し彼の行基に師事したるは藥師寺行信なることを考證し、「青木昆陽」（中村直勝、歴史と地理）は昆陽の生

涯、甘藷の栽培、關學研究、著述等に就て述べ、加藤直枝の日記によりて伊藤東涯の門人青木文藏は昆陽なることを主張したり。文化史的方面に於て「太宰府の文明」(橋川正、無盡燈)は奈良平安朝時代に於ける太宰府の形勢、海外交通、文化の輸入と太宰府文明との關係を見て最後に太宰府を中心とする北九州の宗教に言及し、學藝に關する論文として「出雲風土記の研究」(坂根道治郎、國學院雜誌)は、同書によりて古今の地形、交通、物産、神社寺院等に就て研究せんとして先づ地形考を發表し、「本居宣長の古代史研究」(古田良一、歴史と地理)は宣長の古代史研究の目的、研究法の長所及短所を述べ、新井白石の研究と比較して兩者の神話傳說解釋の異同を明にし、「文化史上より見たる日本書紀」(三浦周行、藝文)は近世の國學者が書紀に向つて放ちたる非難に答へ、我國體と國民性の淵源を本書中に發見し得べきこと及神代卷と神道との關係等を述べ、「書紀編纂千二百年記念陳列の日本書紀古鈔本に就きて」(吉澤義則、史林)は昨年夏京都に於て開かれたる日本書紀編纂千二百年記念講演の際陳列せられたる書紀古鈔本の由來異同等を説明せるもの、「日本書紀について」(鈴鹿三七、歴史と地理)も亦書紀の編纂價值等に就て説き、「足利學校の盛時と西教宣傳」(新村出、史林)は足利學校は徳川時代に至つては既に學校たるの價值を失ひ單に文庫即ち學校附屬圖書館としての資格のみを有したるが、其の戰國時代の盛時に當りては講學所として三千の學徒を集め其盛名國內に噴たりしのみならず、當時日本に布教を始めし吉利支丹の宣教師シヤヰエル等によりて事實以上の價值を認められ本國に報告され、布教史に載録せられ歐洲の大

學(ユニバーシティー)や學院(アカデミー)に比せられ、且つ宣教師は足利學校の出身者を聘用して西教宣傳に資せん企てたる形跡あることを論じたり、次に思想信仰に關するものには、「伊勢神宮と國民の思想」(石卷良夫、國學院雜誌)は我國に於ける忠君愛國の觀念と伊勢神宮に對する國民の信仰とは唯一不可分のものなりとする見地より國民の伊勢神宮に對する信仰によりて國民思想の趨歸を知るべしとする論にして其間天照天神を吳泰伯の子孫とする説、天祖男神說等の誤謬を匡し、「日本古代の祭祀」(清原貞雄、歴史と地理)は古史に見えたる新嘗祭、神衣祭、新年祭等の祭祀に就て其性質、起源、沿革等を略述し、「天滿天神の信仰の發達」(長沼賢海、史林)は佛教史上より天滿天神の信仰の變化を觀察したるものにして、「敍誤に就て」(寺本雄達、六條學報)はハラヒの性質及分化を説き其の發達變遷を概觀せしものなり。而して風俗史の分野に於ては「古代に於ける武器の貯藏と石上神宮」(宮地直一、歴史と地理)は古代に於ては一族の氏神は氏人に信仰上の對象と仰がれたるのみならず、此處に祖先傳來の寶器を收藏して舉族の勢力集中せられたるが、大和石上神宮は實に其の著しき一例にして、其祭神は武臣物部氏の氏神と崇められ多數の武器を貯藏したれば神社兼武庫の觀あり其の地形と相待ちて政治上より危險視せられたることを説き「我が古代文字に現はれたる衣食住」(飯倉篤太郎、同誌)は文獻上殊に歌謠、祝詞、壽詞、記紀、萬葉等より奈良朝以前の我國住民の生活狀態を觀察し、「服忌制の變遷を論じ徳川初期の道德史に及ぶ」(原勝郎、史林)は服忌制の變遷と共に其形式の變化のみならず其の意義の推移を説明し、徳川初期

に之によりて其道徳が如何に推移せしかに論及す、「婚姻の沿革」(江馬務、風俗研究)は神武より推古に至る第一期固有風俗時代の婚姻の風俗を述べたるも未だ完了せず、「戰國時代以後に於ける甲冑の變革に就て」(同人、史林)は本邦甲冑及武器をその性質により時代を割すれば上古より現代に至る迄凡五期に分つことを得ざなし、此編に於ては其第四期(約天正より江戸初期)に該當するものにして先づ其の着用次第の前期と異なる所を述べ次で甲冑各部及刀、指物、槍等の變革を叙述し、結語として甲冑の種類形式激增せしこ以下十五條の特長を挙げたり、「相撲の起原」(喜田貞吉、民族と歴史)相撲の起原とせられたる鹿島、諏訪二神の力競べ、野見宿禰と當麻蹶速との融合等の舊説を批判して之れ何れも後世の如き作法による相撲にあらず、作法による相撲の文献に見えたるは雄略天皇紀に天皇采女を集め相撲せしめしことを以て初見とす、又遺物にありては東京帝室博物館陳列の小土偶中に相撲の像あり、是等によりて上古既に今の相撲の如き一種の闘戯の流行したるを知るべく、其作法も次第に一定するに至りしものなりと説き、「貧民の史的概観」(江馬務、風俗研究)は上古以來各時代の貧民の生活狀態を衣食住等に別ち記錄繪畫によりて叙述せしもの、「左義長に就て」(猪熊淺磨、同誌)は左義長の起原及富中に於ける此の式の狀況を述べ、「平安初期の世相」(櫻井秀、同誌)は平安初期京洛に於ける代表的階級の生活は多少の獨創的氣運を包蔵せりとは云へ、内面的にも外面的にも殆んど支那文明の繼承を理想としたることを述べ、「神像より見たる平安初期の風俗」(江馬務、歴史と地理)は神像の髮風、髮飾、冠帽其他によりて當時の風俗

を考察したるものにして唐風の多き内にも猶ほ一部には我國固有の風俗が依然保存せられたることを説けり、「元祿時代に於ける奢侈の増進」(古田良一、同誌)は此時代に文化の發達したる原因を究め、奢侈の流行と幕府のこれに對する處置を述べ以て奢侈増進の由來及意義を闡明したり。

美術史の方面に於ては、様式の研究より其の年代を論じ、當代の特徴を見んさせる、「長谷寺銅板佛論」(土田杏村、藝文)「藥師寺三尊論」(同人、哲學研究)あり、「土田君の長谷寺銅板佛論に就いて」(喜田貞吉、藝文)は、其の前者に就いて文獻上の研究より推定年代の信すべからざるを指摘せり。「法隆寺金堂壁畫の主題系統筆者并に其の製作年代」(小野玄妙、美術新報)は、壁畫の主題に就いて從來の説を補正し、範を直接印度式に取りたるを云ひ、天武代の製作に比定せむとせるもの、「毘陀羅彫像に對する」(疑問) (松本文三郎、國華)は毘陀羅彫刻の大乗敎の製作なりとの説に對し、當時の毘陀羅と迦濕彌羅の宗敎關係を考察し、同地より支那に來れる譯經僧の劉宋代までは何れも小乗敎を奉ぜるを指摘して其の信じ難きを云ひ、彫像の性質に及べり。「古代中央亞細亞の佛敎藝術に對する疑議」(小野玄妙、美術新報)は法隆寺の玉虫厨子を以て支那北魏前後に涼州にて製作せられしものと見て、從來同地方の佛敎藝術上の觀察を訂さむとせる提言なり。「東寺七祖畫像の研究」(龍精一、國華)は七祖像を金剛智以下の五像と龍猛、龍智の二像とに分ちて觀察し五祖像は記錄及筆法上より見て弘法大師請來の唐畫にして二祖像は五像の或るもの、燒直なるべく筆者は大師にあらず昌泰頃に専門家の描けるものなるべしと推定し且

つ畫像中の畫體をも比較して兩種の相違を指摘し五祖像は唐代の名家李真等の手に成れることを明にしたるものなり、「名古屋城書院の風俗畫」(同人、同誌)は本丸御殿内對面所書院にある風俗畫に就て其の製作年代、畫風等な研究したるものにして、此の書院は清須越の傳説あれども建築及畫の筆致よりして慶長造營當時のものなりと斷じ畫工に就ては岩佐又兵衛の傳あるも京狩野派の名手の製作なるべしと云ひ、此の畫の特徴、浮世繪との關係を述べたり、「聖德太子と我國の建築」(伊東忠太、同誌)は太子を以て我國建築界の恩人又、祖とする理由を述べ當時の建築の特徴を法隆寺を例として説明し、佛教建築の影響に及ぶ、「畫僧周位に就いて」(澤村孝太郎、同誌)は天龍寺の畫僧周位の傳及畫風を研究し、彼が夢窓國師の頂相を圖したること及び頂相以外にも畫筆を揮ひしことを記錄に據りて考證し、且つ彼の畫の特徴を論じ、南北朝より室町時代に經る彼の畫界に於ける地位に論及す、又「足利時代と肖像畫」(原勝郎、同誌)は足利時代は下層民の頭を打ける來る共個人主義が漸く地位を占め來れる時代なるが故に肖像も個性を發揮して前代に見る能はざる發達を遂げたることを論じたり。其他の關係事項としては、「國東塔講話」(天沼俊一、單行)の明後に於ける此の特殊遺物を總括して、詳細に論究せる長編あり。歴史地理の方面には「古代武藏に於ける條里の制と其遺蹟」(藤川伊人、歴史と地理)あり、武藏に於て條里の遺蹟と思はる、地方九郡二十八ヶ村を擧げ、其地域、區劃の方向等を説き次に此等の遺蹟の地方と莊園との關係を叙す、「我國上代に於ける關の配置に就て」(衣笠健雄、同誌)は我國上代の關の性質及び地勢との關係

置關の目的、置關の狀況及其變遷等を研究したるもの、「湊川戰場考」(福原潜次郎、歴史と地理)は延元元年五月湊川の戰跡を現今の地名に當て、考へたるものにして、「穴門考」(喜田貞吉、歴史地理)は穴門又は穴戸なる地名が所々に在ることより其名義の由來を考へ、特に吉備の穴戸に就て實地の觀察により古今の地理上の變化を述べ、穴門神に及ぶ、「錦織寺創立考」(禿氏祐祥、六條學報)は近江の錦織寺は寺傳に據れば嘉禎元年親鸞上人の靈夢を感じて創立する所なりといへども實は慈空の興す所なることを考證せしものなり。民族に關する論文は其數頗る多しと雖も遺跡遺物に據りて考證研究せるものは考古學に譲りこゝには主として文獻により研究せるものを紹介せん、喜田博士の昨年一月より發行せられたる雜誌「民族と歴史」には此種の論文甚だ多し、今其主なるものを記せば「日本民族とは何ぞや」(喜田貞吉)は日本民族は單一なる種族にあらず、天津神の後裔たる天孫民族と之に同化融合したる國津神の後裔と韓漢の歸化人とが相倚り相結んで成立したる複合民族なることを説き、「日本民族と言語」(同人)は日本語はもと所謂天孫民族の言語にして天孫民族の發展と共に異民族間にも普及し其語系より云へば朝鮮語、滿洲語、蒙古語と同語系に屬することを述べ「特殊部落の成立沿革を略述して其解放に及ぶ」(同人)は特殊部落の成立と其沿革とを説き、我國には元來民族の區別によりて貴賤の別を立つることなく、異民族と雖も巧に同化融合して日本民族となれるものにて過去に於て賤民解放の事歴存するに今にして尙彼等に壓迫を加ふるの無意味なるを主張し且つ彼等の解放には彼等自ら其の實質を改善するの急務なるを注意せる

ものなり、「エタ源流考」(同人)はエタの源流には餌取、餘戸、河原者、掃除、細工人、青屋其他多く、此等全部が必ずしもエタとなれりと云ふにはあらずるも主として此等の者がエタの中に教へられ其源に溯ればエタも非人も普通人もそれと關係連絡あるものなりとせり、「エタ名義考」(同人)と併せて看るべものなり、「久具部(傀儡子)名義考」(安藤正次、歴史地理)は久具部なる語義の研究にして、クグツなる語義には、袋の類を意味する場合と、傀儡子を指す場合とあり、而して傀儡子をクグツといふことにつきては諸説あれども朝鮮語の廣大(傀儡子の意) *Yongbe E.* より來りしものにして *Yong* が *Yuen* となり、*E* が *E* となりてクグツといふ國語になりしものならんとの説、「日本民族史の研究」(原勝郎、民族と歴史)は日本民族の研究には從來の如く徒に假定説を立つるを止めて堅實なる研究法によるべく且つ研究の順序を改むるを要し、先づアイヌ民族の研究より始めこれを併行して琉球民族の研究をなさば兩面より比較的確かなる日本上古史を知るを得べし、と論ぜり。最後に昨年度に於て史料の出版せられたるものには「大日本史料」の第十二編之二十一、第八編之五、「大日本古文書」の「幕末外國關係文書」十一、「國書刊行會」の「本朝通鑑」第六乃至第十六、「日本史籍協會」の「會津藩廳記錄」文久三年、元治元年の部三冊、「近衛家書類」三冊等を主なるものと、地方史にありては「北海道史」第一附録地圖等ありしとを數へて此稿を終らん。(案原(親))

朝鮮史 朝鮮總督府が年々巨額の研究費を投じて半島史研究の爲寄與せること大なる別項考古學記述の金石に關する尠大なる書籍

を印行せし上に又「朝鮮國書解題」なる一巨冊の刊行を見たり。これは總督府所藏の朝鮮圖書に簡單なる解説を附したるものにして盤義印版内容等の特異なるものは寫眞版として卷尾に附せり、朝鮮史に關する研究としては先づ「加羅盤城考」(今西龍、史料)を推さざるべからず、即ち加羅又は加耶の異名異地に非ざることを論證して更に之を我が邦にて古く任那と稱する 所以を論證批判し高麗加耶以下安羅、多羅、哆喇、摩、此自煉、已汶、伴跋、帶沙江、子吞、小加耶、星山加耶、等の疆域に就て論證したるもの之と對義して發表せられたる研究を「大花宮と所謂倭城」(池内宏、東洋學報)とす。高麗仁宗の大花宮創造事情は妙清、白蒜卿等の奏上により折々巡幸すべき目的の爲めに造られたるものなるも、其の裏面には妙清等の王を推戴して自己の威福にせむとする企圖より出で、王の十三年妙清、趙匡等忽にして西京に反旗を翻したり、而して此の叛亂に關係深き倭城は東國輿地勝覽にも平壤志にも何等記載する所無く唯僅に李澄の畫きたる平壤の屏風畫に徴して略其位置を推測爲し得ることを指摘す、「高麗穆宗朝の亂」(同人、同誌)は權臣金致陽の陰謀及び西京都巡檢使康兆の行ひたる廢立事件に就て、致陽と太后との秘密關係より太后が致陽に私して生みたる子を穆宗の嗣たらしむべく計畫せしことの禍亂の真相にして直接穆宗を廢するの計畫に非ざりしことを云へり。「公嶮鎮と蘇下江」(同人、同誌)は高麗睿宗三年女眞征伐の結果、占領地の北境に置かれし鎮城なる公嶮鎮は、實錄の地理志に據れば「巨陽城の西六十里の先春峴は尹璫の碑を建てたる所とあれば、英哥沙吾里站の北蘇下江の邊に擬すべきを論證し、而も巨陽城は元の渤海國

都址忽汗城即ち今日の東京城ならむと考へらるれば、英哥站を布爾巴嶺とするより、蘇下江邊の公險鎮は正に朝福成河畔の敦化附近ならむとす。その他「朝鮮より觀たる琉球」(名越那珂次郎、歴史と地理)「鳴洋峽の海戰」(柏原昌三、同誌)あり前者は朝鮮琉球の交通は高麗辛昌元年に起り朝鮮仁祖七年迄前後二十一回の交通連續せしこと並に朝鮮人の琉球に關して有せし知識を叙し、後者は慶長の役、我艦隊が全羅道の花源半島鳴洋峽にて潮流の關係上、源平合戦に平氏が壇の浦にて蒙りしと同じ運命に陥り敗北を受けたることは、地理上、潮流上の知識缺乏の爲めなることを指摘す「大内義弘と朝鮮との關係」(潮野馬熊、史學雜誌)「慶州一見」(名越那珂次郎、歴史と地理)又一讀の値なしとせず、前者既に收む、後者は溫古閣陳列の遺物を紹介し併て柏梁寺、芬皇寺の遺蹟に説及せり。(那波)

東洋史は昨年の東洋史界は時事問題に關聯して史的研究の發表せられしものに「對支政策管見」(桑原隲藏、外交時報)「支那の傳統的對外行動」(市村瓚次郎、太陽)「支那の外力利用」(稻葉岩吉、太陽)「支那の真相暴露」(内藤虎次郎、外交時報)あり。又「東洋政治思想の史的的研究」(石田秀次郎、政治經濟學論叢)に就きて外人の觀察したる Sarker G. Democratic Ideas and Republican Institutions in India を紹介せるあり、「支那新舊思想問題」(中村久四郎、斯文)は西思想の衝突地が北京大學にして、新派は支那文學の平民的社會的通俗化を計り舊派は國史館の學者と提携して説文訓詁を支那文學の根本とみなさむとし林紓、蔡元培兩氏論争の内に悶けるを云ふ。次に一般的論議研究の方面を見るに「支那學の沿革」(田

中琴一郎、東洋學報)は益々佳境に入りて佛人布教者の支那に入りしは一五八一年より一六八七年迄に總數九十六人に及びしことより、馬若瑟 De Préneux に書經以前の古代並に支那神話支那雜記の著ありしのみならず、十三經元人百種曲を韻出し巴多明 Pei-te-min は從來の支那地圖の誤謬を直言し、雷孝思 R. H. S. 等は多數の支那部分地圖を康熙五十六年に大成し、馮秉正 Mailla は通鑑の佛語譯を試み、衛方濟 Noe は支那六經支那哲學を出版し宋君榮 Gauthier は支那滿洲語を研究の旁蒙古史唐胡史を公にしたることより Langles, Kaprathi, 諸氏の功績に及びり。政治經濟方面に於ては「露支關係の第一期」(石田幹之助、外交時報)は近刊の Gaston Cahen G. Histoire des Relations de la Russie la chine sous pierre le Grand に平定羅刹方略を參酌して關係史實を述べ、「周末に於ける地方の開發」(那波利貞、藝文)は未完なるも、東周に入りてよりの對立各國の人情の相異、南方支那人の活躍却りて黄河々畔の民族に勝れたるものありしことより世相の一變、秦國勃興の機運到來せることに論及し、「支那居留地概論」(三枝茂智、國家學會雜誌)は租界の成立發達より、借地との區別、租界に於ける自國人外國人支那人の位置を論ず、尙ほ此の種のものに支那現代の組合制度を論じ、會館、公所に就きて其事業、勢力、利害を説きたる「支那の組合制度」(田中保平、東亞經濟研究)あり、親屬の意義、家制、婚姻、親子、親屬會等に就きて詳論したる「支那民律と族制」(稻葉岩吉、同誌)あり、「司馬遷の自由放任説」(小島祐馬、政治經濟學論叢)は老子の説くが如き理想社會は千萬年の後と雖、實現し得るものに非ざれば人が自己の利欲心を満足せむが爲

めに活動する社會を治むるには之を自然の儘に放任するを以て最上の策なりとする説を紹介して之に批判を加へたり、「漢代に於ける國家財政と帝室財政との區別並に帝室財政一般」(加藤繁、東洋學報)は一昨年の後を受けて帝室財政の支出に賞賜、皇太后皇后太子の費用、土木費あることより内帑と國費を論じ帝室財政の機關を研究し財政組織に此の二大別を置くことの前提限りに終りしことを指摘す。「算賦に就いての小研究」(同人、史林)は兩漢時代の人頭税なる算賦の定額を詳にし得るは宣帝以後にして百二十錢なる數は成帝建始二年以後の規定なり、又口賦は算賦の成人の人頭税なるに對する幼年者の人頭税にして其の名稱及其起原は比較的古きものなるを論述す。「蕪田の禮に就いて」(小島祐馬、經濟論叢)は親耕の或る程度迄は周代にも實行せられたるものなるべきを謂ひ其の方法、場所、名稱の意味に及ぶ、若し夫れ特種研究の論著に至りては多くの名篇を見る「カンフウ問題殊に其陷落年代」(桑原隲藏、史林)は「イブン・コルダードヘーに見えたる支那の貿易港殊にジャンフウとカンツウに就いて」(同人、史學雜誌)と姉妹篇をなし、前者は從來異説多きカンフウ港の那邊に擬すべきやを論じマルコポーロの旅行記アブルフェダーの地理書と黃巢の亂の事情とより杭州説に對して一一反駁を加へ、杭州及び廣州の陷落事實年代を明瞭にしクラブロートの二に一段の批判を加へ唐末の紀年の紛糾せること、新唐書の僖宗本紀に見ゆる杭廣兩州陷落年次の信するに足らざること、黃巢の杭州を陥れしことの信惡し難きことを論じカンフウ、杭州説の否定カンフウ陷落年代の確立、カンフウ廣州説の助成に關する從來の研究に進捗を與へ、

後者は el-Wakin, Khanlou, Djianlou, Kanton の四港の中第一者は交州に擬するを妥當とし第二者は廣州なることも疑無きが第三者第四者に就きては Spengler の Kanton 百河口説、Yule の上海附近説 Reichtofen の膠州説 Goosj の九江説、石橋氏の萊州説等あるも著者は名稱の類似物産の一致、唐時大食波斯蕃商來集の事等より揚州説を採るを主張し當時に於ける揚州繁昌の狀態に論及す「支那人の食人肉風習」(同人、太陽)も亦注意すべき論題にして食人肉の動機は饑饉より來る要求、嗜好の爲めにするもの、憎惡の極より致すもの、疾病治療の目的よりするもの、四種を數へ得べし、日支親善を圖る日本人として支那人を了解せむとするには經傳詩文によりて其の長所を會得する表面觀察も必要ながら亦裏面より其の風俗習慣を知るの必要あることを警告せり。「支那俗間の道教趣味」(後藤朝太郎、東亞之光)は偶此の要求に適合すべく現れしものなるべし。「支那に於ける本草學の起原と神農本草經」(小川琢治、史林)は別項考古學に收めし「化學上より見たる東洋上代の文化」(近重眞澄、同誌)と共に新しき研究なるが、山海經に見ゆる藥用たるべき植物動物をば原始的の本草古書と比較すれば山海經の藥物は食、佩、服の三用法あり、これ戰國以前の事情ならむ然るに戰國以後は藥物の知識進歩し服藥の外に針灸も起り、前漢に入りて益々發達せしも、其學問となりしは後漢に入りてなるを論じ神農本草經の性質と其の作成時代とを推論し、併て其の原形内容より之に現れたる唐宋の諱字の回避に及ぶ、而して化學上より見たるものは支那化學の埃及カルヂヤに比して其の起原の劣らざることより仙術、金工、染料、金石藥物を一瞥して一々分析表

をも羅列し支那化學の三代に發し花を漢に開き果を唐に結び以後凋落せしむと謂ふ。「清談源流考」(市村瓚次郎、史學雜誌)は清談の語原は魏の劉楨の贈五官中郎將詩にあるを始とし魏晉を通じて用ひらるる清言、清辯は其の代用語なりとし、其の起原は後漢末に胚胎し魏晉に發達したるもの、其の原因は後漢訓詁の學の博大深遠なる思索を缺きたる結果に出でて氣節忠直の士の終を令くせざる風ありし爲め識者の諷晦する傾向を生ぜしこと、並に何晏、王弼、竹林七賢、八達を行爲を論じ、鮑生の無君無臣論に及び之に加ふるに東晉の反清談派を以てせり。「公羊家の理想とする大同の社會」(小島祐馬、經濟論叢)は禮記禮運に見ゆる一の理想社會なる大同社會は道家の思想にも非ず墨家の思想にも非ずして純然たる儒教の思想なるが、近來の支那の公羊學者は其の春秋の解釋法の立脚地より之を唱道する者漸く多を加へ來りしが此の思想を引き出すべき要素は既に孔子の思想中にも含まれ居りしことを論證す其他「緯書に就て」(小柳司氣太、東亞之光)「黨民族考」(白鳥庫吉、東洋學報)等の如き研究等注意すべし。書籍の本文研究に於ては「再び左傳著作の時代を論ず」(飯島忠夫、同誌)ありて左國の歲星に關する記事は皆三統曆を以てして解釋し得るも、古曆の十二年一周法にては解し難く其の發言の記事の中には秦漢に關するものありて前漢末に出でたる學說に一致し戰國時代及其以前の曆法を研究する學に對して信憑すべき資料を提供せざるを痛論すること一番、「再秦邊紀略に就いて」(内藤虎次郎、史林)は一昨年の研究發表後に得たる所を披瀝し、四庫全書總目の記載は其の卷數の印本並に傳鈔本と合せざる外、著作年代の推定は略著者の所見と一

致すること指摘し、尙ほ梁份に懷葛堂文集十五卷あること、並に章學誠が稿本中の劉湘輝傳に此の書に關する記述あること王昆繩の居業堂文集にも梁份に關する數篇ありて奉邊紀略著述の事情を知るに足るものあることを指摘する所あり。又西城考古圖譜唐鈔本斷片中の一なる河上公老子本に詳略二種ありしこと、宋元以後の板本に建安虞氏本系と纂圖互注本系の二統あること、我邦に傳來せし舊本は彼土の板本と甚しき異動ありて最もよく唐鈔本の面目を傳へ居ることを看破したるは「河上公老子唐本考」(武内義雄、藝文)にして、陳鐸筆譯の書なる蒙古逸史が或は其の原本のエルデン・イン・エリへの第二稿本ならむかを注意したるは「蒙古逸史の原本」(石濱純太郎、同誌)なり。其の他「九姓回鶻とToquz Oghuzとの關係を論ず」(羽田亨、東洋學報)はOghuzなる語に姓の義存しOghuzとToquz Oghuzは同一民族なれば、之は支那史に見ゆる鐵勒の九姓にして回鶻を指すべきに非ざることを謂ひ、「室韋考」(白鳥庫吉、史學雜誌)は北魏頃より知らるる室韋の中心が今の齊々哈兒附近にして隋代に分れ興安嶺の東に在りて嫩江流域に據りしを、唐代に所謂室韋は主として遼東室韋を意味し、其の人類は言語上より判斷して靺鞨、阻卜と共に蒙古種ならむかを謂ふ「明末に於ける鴨綠江方面の開拓」(和田清、同誌)亦成化年間建州女直を勦討して連山關外の開拓を試みし事より嘉靖年間の開發寛甸六堡の展築を論ず、「繪畫發達の比較文化史的及心理學的研究」(下澤瑞世、東洋哲學)「佛書の梵語植物」(松村任三、東洋學藝雜誌)「五言詩發生の時期に關する疑問」(鈴木虎雄、史林)皆さりとりに興味ある研究なるが「經子に見ゆる宋人」(桑原隲藏、藝文)

は主として疑思煩算を以て知らるゝ宋人の風習の偏に殷禮を墨守し殷に對する執着心と周に對する敬愼心とより必要以上、に舊慣故習を固守せし結果なりと説きたるもの、(後漢の經學選舉と士風との關係) (市村瓚次郎、斯文) は後漢に於ける經學の流行に就て官學私塾の有様其の流派傳統を調査し各郡國選舉人の數より氣節の士輩出の關係を論じたるもの、(西藏王葉宗弄謎の研究) (楠基道藥文) は一昨年の讀を受けて文化的方面、西藏文字の創作、佛教の輸入と造寺の事業を述べて結了、(支那の石經) (松本文三郎宗教研究) は佛道儒三教の石經に涉り經幢、摩崖、碑版より房山石經の由來内容、道教石經、儒教石經、漢魏石經に關する疑議、開成石經に關する疑議を詳論す。隋の煬帝の時入貢せし赤土國に就いて明の黃省曾は之を印度に求め、張變出でて暹羅説を採り以て今に及べるを西洋學者の説にも參酌して「赤土考」(桑田六郎、東洋學報) を草し隋書以外の赤土の記事は史料として價值少く常駿の所謂赤土は五行説よりする南方國の意に使用せられ、本名は失して今求むるに荷無き結論を致せり、(バリ開闢乾隆年間準回兩部平定得勝圖に就いて) (石田幹之助、同誌) 其の制作の經緯と其の存在の稀なるを説けるあり、ラドロフ博士閣歷事業と會見の有様を叙したる「ラドロフ博士」(羽田亨、藝文) あり、「看過せられたる隋唐文化の價值」(那波利貞、歴史と地理) を論じて繪畫、純文學、音樂、書道、製紙、製墨等工藝方面に於て上隋唐文化の衣鉢を傳へ、下宋元文化の先驅をなせる現象あるを例を擧げて論述せるあり、旅行記としては「續清國內地旅行談」(塚本靖、東洋學藝雜誌) あり、圖書の出版に於ては「滿蒙通覽」の完成、滿蒙叢書第

一冊として口北三廳志の公刊、滿蒙秘笈第六集の刊行等ありたり。(那波)

西洋史 昨年物故せられたる箕作博士の業績を永遠に紀念すべき二大著述が相前後して、この年の史壇を飾りしことは先づ特筆すべきことなるべし。「世界大戦史」が平和克復と共に世に出で讀書界の視聽を傾けしめ、其内容の精到を極めしを以て甚大なる歡迎を受けしは云はずもがな、若し夫れ「フランス大革命史」(前編)の公刊に至つては博士が半世の心血を注ぎし研究結果の精髓を始めて吐露せられしものにして、寔に學界多年の要望を充されしものたるなり。大革命の發端より説き起こして王政顛覆に筆を擱かれし既刊の前編はやがて公にせらるゝ後編と相俟つて歐洲諸專門史家の類書の間にあつても優に特殊の位置を占むべき述作なるべし宗教史の方面に於て「基督教教理史」(日野貞澄) は原始教會時代より希臘派ラテン派の神學中世並に宗教改革時代に於ける諸家の神學思想を精細に論述したる稀有の良書なり。「南歐遊記」(濱田青陵) は著者が曾遊の思ひ出を辿りて南伊、シチリヤ南佛プロヴァンスの古跡に往時を追憶せるもの、正に歴史地理界に於ける絶好の勞作なり。興亡史論叢書は一昨年の續刊として「佛蘭西革命史輪」(綿貫哲雄譯)「亞歷山遠征史」(坂本健一譯)「歐洲民族文化史」(井上忻治譯)「史論叢錄」(大類仲編)「立國教育論」(中島平四郎譯)「海戰史論」(加藤政司郎)等を公にせり、孰れも不朽の名著を本邦讀書界に紹介せるものとして其勞多とすべし。諸雜誌に現れたる新學關係論文中注目すべきものは古代史に於て、「テミストークレンスの偉業」(坂口昂、大觀) は希波戰當時に於ける一大個性テミス

トクレス出現の意義其の海軍擴張策を論じてサラミス海戦に及べるもの、「ハンニバルの人格と包圍戰術」(箕作元八、同誌)はハンニバルの人物政略及其の得意とせる包圍戰術を説き、カンチー戰の痛快なる戰勝を述べたるものなり。ゲルマニ族史及び中世史の範圍に屬するものには「古獨逸民族の宗教生活に就いて」(植村清之助、六條學報)あり、ケーザル・タキッス等古代記者の報する所によつて原始ゲルマニ族信仰の諸神宗教上の儀禮習慣を論究せるもの、「チエルススキ旅の興廢に就いて」(同人、史林)は同族の興廢を尋れて羅馬帝國の對北蠻策を論じたるものなり。近世史方面にて「關將デ・ロイテルと其海戦振り」(箕作元八、大觀)はデ・ロイテルの經歷より英蘭間三回の海戦を説き、殊に其傑作戰たるテクセル海戦の顛末を詳述せるものなり。最近世史特に時局關係の論文としては露獨動員運送論(原勝郎、外交時報)あり、一九一七年に起りし露前陸相スコムリノフ裁判に於ける彼並びにヤスシユケ并ツチの證言より獨佛新聞紙上に於ける動員問題即ち開戰の責任に關する論戰に對し該證言の史的價值を批判せるもの、「一九〇五年七月の獨露親近に關する種論」(同人、同誌)は所謂ヘルリイ・ニツキー・コレス・ボンテンスに暴露されし日露戰役當時の獨露兩帝交換文書に就き米國史學雜誌上に出でしフエー氏の研究論文を批評し且該文書の史料たる價值に疑問を附したるものなり、「維納會議」(立作太郎、同誌)は同會議の顛末其決議事項及び其際在に於ける領土保全に關する一種の國際聯盟の提議ありし旨を述べたるものにして、「世界の五大講和會議の史實と其の比較」(牧野義智、國家及國家學)は維納、巴里、伯林、及びポーツマス會議の概要

を述べ、其續稿たる「大戦講和史論」に於て今回のベルサイユ講和を説明せり。「モルトケとケーニヒゲレッツ會戰」(齋藤清太郎、大觀)は普墺戰役に於けるモルトケの對佛作戰及び該戰の經過を論述せるものなり。歴史地理的方面の論文としてはオスチヤ港の歴史地理的研究(阿部秀助、歴史地理)あり、其遺趾に就て羅馬盛時に對する史的觀察を下せるもの、「ホッダムの思出」(長壽吉、史林)は著者が往年の觀遊を記しフレデリック大王の稀有の性格を偲べるものなり、其他「古代史に現れたるバルカン半島」(長瀬鳳輔、歴史地理)「史上に現れたるライン河」(時野谷常三郎、同誌)「ドナウ河とババリア」(大類伸、同誌)は其地方に關する史的沿革を述べ、これに關聯せる重要な問題及其將來に於ける意義に論及せり。而して「毛皮國本の國家」(坪井九馬三、史林)は毛皮を以て立國の物質的基礎となせる國家の標本と見做すべきカナダ及シベリヤ經營の發展實相を興味深く説述したるものなり。(植村)

考古學 昨一年の我が考古學界の趨勢を概観するに當つて最も注目すべきは解剖學者人類學者の遺物に對する科學的研究と相待ちて先史考古學の方面に研究的氣運の着々として實現を見たるものなり。先づ此の方面に於けるクラシツクの遺跡とも云ふべき河内國府に於て昨年四月新に東京大學の小金井博士の發掘ありて人骨八體を得たるが、中に特徴ある骨格と骨器とあり、同時に行へる本山彦一氏一行の發掘にては土器に關して新材料を示せり、同年八月には又京都大學の第二回の發掘ありて、濱田博士は東北大學の長谷部博士と共に調査に従事し七體の人骨を採掘したるが、其の二には耳の傍に鼓形の土製品が存在せる新事實と一種の骨製品

か発見せり、十一月小金井博士は松村瞭氏と共に先の地域に接続せる地點を發掘して十二體の遺骨を收めたり、かく著しく人骨の數を加へたると共に、益遺物上の新事實の記錄を作れり。次に備中津雲の貝塚は、大阪大學の大串博士の一行前年の發掘に引續き七月末より八月初に亘れる調査によりて十一體の人骨を採集し、考古學上にては貝輪篋裝の狀態を示す資料と土器の層位的調査に正確の度を加へたるあり、これと前後して東北大學の長谷部博士また人骨三體を發掘し、更に九月より十月に亘りて京都大學の清野博士は前後二回の發掘に於て實に四十有六の多數の人骨と骨器其他の遺物を発見せり、東北の方面にては、前年宮戸島貝塚にて此の種の一の重要な記錄を示せる東北大學の松本博士は、四月浦戸島に於て數體の人骨を得たるを初め、これより八月に亘りて陸前登米郡青島貝塚にて十四體の骨格を發見せるあり、同大學の長谷部博士は別に陸前氣仙郡細浦上の山貝塚より一種の環狀石鐘と共に人骨一體を得たり、九州方面には昨年に於て此の種の發掘行はれざりしも、遺物の層位學的發掘に於ては濱田、長谷部兩博士の薩摩攝留の調査は興味ある結果を收めたり。たゞ是等の調査の結果の報文として現はれし「浦戸島の遺跡」「日本最古の遺蹟」(以上松本彦七郎、河北新報)「石器時代遺跡行脚」(長谷部言人、歴誌と地理)「津雲の貝塚掘り」(大串、長谷部兩氏、中國民報)等は何れも豫報に過ぎまり、其の上の山貝塚に就いてのみ、包含貝類を記錄せる「陸前國氣仙郡末崎村細浦上の山貝塚の貝類」(鳥羽源藏)と、環狀列石に就いて「陸前國細浦上の山貝塚の環狀列石」(長谷部言人、以上人類學雜誌)の研究を見たるも、其の大部分は

本年以後に待たざるべからず、而して昨年に於ける論著は實に次下に述ぶる如く前年の調査に係るもの大部分を占めたり。即ち尾張熱田の貝塚より得たる「日本石器時代人骨に就て」(佐藤龜一、人類學雜誌)は、同貝塚が彌生式系統に屬するを記し、其の人骨の特質を列舉して、該人骨は「アイヌ」人并に現代日本人の何れにも類似せざる一種固有の特質あるも、他方に於て著しく現代日本人に類せるものあり、從つて日本人に一定の關係ある人種なるべしと云へり。肥後「阿高貝塚の人骨」(山崎春雄、熊本縣史蹟調査報告)は同遺蹟出土の人骨の測定の結果を概記して、其の四肢骨指示數アイノに近き數を取れるを示せり。是等について宮戸島貝塚に就いて多くの報文を見たり。即ち「宮戸島貝塚の調査」(早阪一郎、現代の科學)は同遺蹟の地形と其の狀態を記せるものにして、「宮戸島里濱介塚人骨の埋没狀態」(松本彦七郎、同誌)は其の第一回發掘に係る十三體の人骨の埋没の層位及び狀態を詳記して埋葬の際に於ける一種の規矩の存在を推定すると共に、人骨の直下に炭及び灰の層あり、又人骨及び附近に丹の附着せる事實を舉げたり。「宮戸島里濱貝塚の土器」(長谷部言人、同誌)は各層位に於ける土器の相違を調査して、これより狭義の彌生式土器の名稱の不可なること、アイノ繩紋土器と彌生式土器の同一根源説には賛するも、所謂原始繩紋土器の存在の認容すべからざるを説き「再び宮戸島里濱貝塚の土器」(同人、同誌)は更にこれを補訂せるものなり。「宮戸島里濱及び氣仙郡獵澤介塚の土器附特に土器文様論」(松本彦七郎、同誌)は同じく其の遺物存在の層位に基き、形狀文様を分類して其の發達の經路を見むせるものなり。「陸前

國寶ヶ峰遺蹟の分層的小發掘成績(同人、人類學雜誌)また同種の試みなり。而してこれと人骨との觀察より同代の人種に進める研究には「日本石器時代土器」(同人、理學界)の土器の文様の區別より入りて、其の調査上の層位學的見地より、我が石器時代の土器を五類に分ち得べしと云ひ、我が土器は一見繩紋と線紋の二大別あるも、兩者は密接なる聯絡を有し何れも一系統に屬すべきものにして、垣發齋哉また此の系統を引けるなりと論結せるもの、「日本先史人類論」(同人、歴史と地理)は以上の土器論を出發點として、宮戸島及び津雲發掘の人骨の示す所より、我が石器時代の住民はアイヌと近縁の汎アイヌ人種群と稱すべく、而してまた現代日本人の祖先とも關係あるべしとせり。「石器時代住民と現代日本人」(長谷部言人、同誌)は現代日本人の地方的身長の相違より、先に發表せる「蝦夷果してアイノなりや」の論を再説して、其の土器論を繰返して、現代日本人の祖先の石器時代に於いて一通り揃へること主張せるもの、是等の説に對し、「河内國府石時期代遺跡發掘の一種の土器」(喜田貞吉、民族と歴史)は從來の所説を再記して、昨年四月同遺跡出土の人骨に伴へる土器の型式より、其の上層竊生式との關係を否定して、下層の別種のアイノの遺跡なるを明言せるあり、「河内國府發見の耳飾石環に就いて」(大野雲外同誌)は同じ遺跡より出土せる石製珠狀の環と同一の遺品を探索して、これをアイヌ系に屬させざる點に於いて後者に一致を見る是等の記述に於いて著しく認めらるゝ新傾向は何れも遺跡の層位に注意し、其の包含の土器の様式系統を確立して發掘の人骨の示す所に併せ問題を解決せむとする方針に依れることにして、是れ

實に近世科學的考古學の此の種問題に採れる唯一の方法に異ならず、我が先史考古學の主要部をなす人種論の如き從來種々の説あるも、此の研究の進歩完成に依りて、初めて到達鮮明し得可く、日本人種問題の如きもこれに加へて年來東京大學の松村廉氏の熱心に從事せる日本各地に於ける人體測定の完了を待ちて兩者の比較上初めて信すべき科學上信すべき結論を得べきなり。而して松村氏の調査は昨年度に於て、前年の男子の頭蓋に關する報告につき「日本婦人の頭形と其の地方的異同」(東洋學雜誌)の長文の研究あり、また同年四五月に亘り調査せる「琉球人の頭形に就て」(同誌)の、其の男百四十人、女六十八名に就いて測定せる詳密なる結果を掲げ、短頭最も多く、日本人のそれと全く一致せることを示せるものなごありて着々歩を進めたるは斯學上特筆すべきなりなほ人種問題に就いては「ミクロネシアの土俗調査を讀む」(辰馬悅藏、歴史と地理)の前年松村氏の發表せる英文「ミクロネシアに土俗について」に關聯して、我が遺物土俗に南洋的色彩の多きか注意し、我が古代文化及び人種の研究に、此の方面の調査の必要なるを提唱せるものを見たり。是等の論著の外先史考古學に關する業績には、前年來學界の注意を惹きつゝある竊生式土器に關する報告と、一般同代の遺跡遺物に關する研究とあり。「竊生式土器形式分類圖録」(京都大學考古學報告書)の此の種土器研究の基本となるべき形式の集成圖を提供せるを初め、「大和山邊郡二階堂村大字平等坊石器遺跡」(佐藤小吉、奈良縣史蹟調査報告)、「近江國蒲生郡岡城の竊生式土器」(島田貞彦、考古學雜誌)、「丹後竹野郡深田村字黒部竊生式土器遺跡」(京都府史蹟調査報告)等個々の新

發見の遺跡の狀態を詳密に記載せるを他方此の種の綜括的記述として「彌生式土器を遺した民族の研究」(大野雲外、歴史地理)を得たり、後者にありては前年末發表を見たる千島アイヌに關する佛文大著「千島アイヌの考古學的及土俗學的研究」(島居龍藏、東京大學紀要)の各方面よりの詳細なる調査を集めて、著者の見解を加へたる研究あり、「北海道に於けるツングース種族の遺跡遺物」(岡部正己)は同地に存する石籬推石彫刻人造石等か其の民族の所産と見たるものにして、「臺灣臺北圓山の巨大なる砥石並に貝塚」(宮原敬、以上人類學雜誌)は同貝塚に關する實査の結果を録せり。次に上代古墳關係の事項に就いて觀るに、是れ亦前年より漸く現はれ來れる正確なる圖類を添ふる調査報告の盛行せることにて、研究の基礎のこゝにも確立せんとするを明に認むるを得べし。此の類の報告中特に注意を惹く一は裝飾古墳に關する論著にして、京都帝國大學考古學研究報告第三冊所載の「九州に於ける裝飾古墳」(濱田耕作、島田貞彦、梅原末治)は、第一冊發表の肥後に於ける同種古墳の報告に続き、同國釜尾、天草維和、花園松橋、吉野等の遺蹟を記述し、併せて筑後二軒茶屋の彫刻ある石棺を藏する古墳に及べるもの、各種の印刷を應用して、古墳の形狀、文様を精密に傳へたり。「河内國高井田なる藤田家墓地構内の横穴」(高橋健自、考古學雜誌)は一昨年發見せられたる數個の横穴壁の繪畫を記述し其の圖形と他の遺物とを比較し、また唐草文様あるもの、文字の存する類に及べり、「備中國都窪郡新庄下古墳」(和田千吉、同誌)は其の地の裝飾古墳の紹介にて、其の構造と遺物に就いて同じく正確に記載せり。なほ此の年に於て新たに隠

岐の島後に文様ある横穴の發見を傳へたるは注意すべし。各地の遺跡に關する此の種の報告としては、大和に箱式棺を石室内に埋藏する「大和吉野郡北六田の古墳」(高橋健自)、徑一尺三寸の大鏡を出せる「柳本村大塚古墳」(佐藤小吉、以上奈良縣史蹟調査報告書)の二編あり、京都府にては「山城綾喜郡三子塚古墳」(島田貞彦、考古學雜誌)の特殊の構造を有し且つ埴輪土偶を發見せる同古墳の調査を初め、同府の史蹟調査報告書に「乙訓郡物集女の群墳」(八幡東車塚)「竹野郡鏡子山古墳」(同神明山古墳)(以上梅原末治)等を載す。北陸には鹿角製裝具を發見せる「越前足羽郡社村西谷山上發見の石棺に就て」(上田三平、考古學雜誌)あり、山陰道の「出雲に於ける特殊古墳」(梅原末治、同誌)は前年より引續ける石棺式石室の總括的記述にして、「出雲國八束郡大草古天神山古墳發掘遺物」(高橋健自、同誌)は前者の一の遺物を紹介せるものなり。九州に於ては肥後の石人ある古墳の報告に「平井村の石人」「白塚の石人」(以上下林繁夫)「江田村舟山古墳」(梅原末治、以上熊本縣史蹟調査報告)の三編あり、「九州南部に於ける地下式古墳に就て」(瀬之口傳九郎、考古學雜誌)は日向、大隅に於ける此の一種の横穴を録し、「薩摩國薩摩郡に於ける原始的古墳に就て」(山崎五十磨、同誌)は薩摩にて新に發見せる石器土器の併存せりと云ふ箱式棺の報文なり。是等の上古の墳墓の調査と共に昨年に於ては其の後の墓制の沿革を遺跡遺物上より徵證せる「中世の墳墓」(高橋健自、史林)の一編を見たり。奈良朝より室町時代に至る變遷を明示せる勞作なり。古墳以外の遺跡に就いては「近江國蒲生郡に於ける窯址特に釉藥陶器に就いて」(島田貞彦、考古學雜誌)あり

又此の種遺跡の調査保存を目的とする史蹟勝地調査委員會の官制の昨年に於て新に發布を見たる事は、こゝに特記すべきことならむ次に上代の遺物の研究として前年に引續き特に多く論議を見たるは鏡鑑沿革の研究なり。先づ「年號銘ある支那鏡に就いて」(補遺)(富岡謙藏、考古學雜誌)は新に吳の永安四年鏡を紹介して、銘鏡の干支に錯誤あるを注意せるもの、「古式支那鏡鑑沿革」(中山平次郎、同誌)は前年より續ける長編にして王莽鏡より遡りて、富岡氏の考定せる前漢諸鏡の系統の連絡を求め、何れも雷紋鏡、精白鏡より發達せりと説き、他方始建國二年鏡の式を初め方格四神鏡を王莽代に局限して、これと同系統の諸鏡を悉く後漢代となさむとの新しき試みなり。「龍鏡に就いて」「所謂六朝神獸鏡に就いて」(芝崎の口始元年鏡と江田の六神四獸鏡)(以上同人、同誌)は前著の後者を更に一々に就いて詳述し、これに特有の解釋を加へたり。「王莽時代の鏡に就いて」(高橋健自、同誌)は從來同代の遺品とせる方格四神鏡以外に、王氏作鏡新作明鏡等の銘ある半肉刻の神獸鏡、盤龍鏡及び畫象鏡をも同代に比定して、鏡の系統論を更へむとせり。これに對して「王莽時代の鏡に就いて高橋健自君に」(喜田貞吉、民族と歴史)は、其の新に同代に比定せる鏡の支那に殆ど所見なく、日本の古墳にのみ多數に出土することの日支古代の事情より考へて不可能なるべきを指摘せるが、「口始元年鏡と建武五年鏡」「同補遺」(中山平次郎、考古學雜誌)は直ちに高橋氏の説を採用して、從來三國と六朝代に比定せる此の二年號鏡を王莽及び後漢初に當て、また佛像ある繪文様式神獸鏡を以て同じく後漢代の製作と主張し、「神獸鏡より見たる東西兩文明の

接觸」(同人、歴史と地理)に於ては終に是等の型式は健陀羅美術の影響なりとせる奇抜なる見解を示せり。別に「銅鑲について」(後藤守一、考古學雜誌)は所謂畫象鏡の年代を考證して、文様上より「王莽時代の古鏡に就いて」の説に禁意を表せるあり、「所謂王莽鏡に就いての疑問」(梅原未治、同誌)は是等の諸見解を疑ひ、所謂方格四神鏡の單に王莽代のみならず、漢代より三國に亘りて行はれたる例證を挙げ、高橋氏の新に考定せる諸鏡の三國代に比定すべきものなるを説きて、富岡氏の説を祖述せるもの、されば本年初富岡氏の遺稿なる「古鏡の研究」の出づるに於て、更に多くの議論を見るべし。特殊の遺物の研究として、此の外なほ未完ながら「銅鑲に就いて」(後藤守一、考古學雜誌)あり、銅鑲に關しては「南葛城郡名柄發掘の銅鑲及び銅鏡の一編、此の特殊の實例に就いて、其の古鏡の日本製なるべきを主張せり。また「古錢分析表」(甲賀宣政、同誌)は十數年に亘り日本支那の各種の古錢に就いて、著作の行へる結果を總括せるものとして、此の種研究上永く基準となるべき記録なり。此の如き我が上代の遺跡遺物の研究の進歩と共に、昨年に於て現はれたる總括的、文化史的考察には、先づ「日本の古墳に就いて」(濱田耕作、歴史と地理)の石棺、石室發達の系統と、瓢形墳の起源に關して推論を試みたるあり、「世界文化の三大潮流」(西村貞次、大觀)また此の種の概論にして、内に同じく瓢形墳の起源を記して、本邦古墳構造の西方諸國と密接なる關係あるを注意せり。「日本上古の狀態」(内藤虎次郎、歴史と地理)は支那の文獻と考古學上の遺物よりして、日本の開國と其の文化發達の一斑を説き、「日本上古の文化に就いて」(西川直

二郎、同誌)は遺物に表はるゝ文様を考察して、我が上古の文化史上に占むる階段を説ける新研究なり。また「遺物上より見たる上古の家屋(高橋健自、同誌)は材料を家形埴輪に取り、石棺横穴の形状に併せ考へ、當時行はれたる家屋の種類と其の發達を推測せり。」「日本民族と住居(喜田貞吉、民族と歴史)は、これに對し、土俗學上文献上より觀察して、當時の住居に竝屋と東屋の二者あり、前者は宮殿或は神社の建て方にて、天孫の傳へしもの、後者一般に存せる庶民の住居にして國津神の系統と見るべきを提言せるものなり。轉じて朝鮮方面に於ける樂蹟を見るに、前年より引續ける朝鮮總督府の古蹟調査事業の着々進行しつゝあり、大正五年度古蹟調査報告、同特別調査報告等豐富なる圖版を有する報告書の續々公刊して其の結果を傳へ、半島遺跡の組織的に調査考究せらるゝは學界の慶事たり是等の報告書中島居氏は平安南道黃海道兩地方に於ける有史以前の遺跡の探究の結果を録して、ドルメンを以て同代の遺跡と斷じ、關野博士は平安南道大同郡、順川郡、龍岡郡に於ける樂浪、高句麗時代の遺跡を簡明に記し、其の樂浪時代の分に就いては「特別報告に精密なる實測圖を載せたり。今西學士が京畿道佛巖山山城址同北漢山遺蹟同道及黃海道の遺蹟實査の結果と、文献の示す所とを併せ論ぜらるゝ同氏の高麗諸陵墓調査報告書」と共に後の基準となるべき記録なり。報告書以外にては「新羅統一時代の瓦博文に就いて」(原田淑人、國華)の特に双鳥鳳凰等の文様ある遺品を採りて其の發達系統を論じたるものを見たり。支那方面に於ては、既述の鏡鑑の外には、「支那上代の石器玉器より見たる漢民族」(林泰輔、史學雜誌)特に注意を惹く

著者は文獻と遺物とを基として、土器の石器に系統を引けるは、玉の古來西方より産するを併せて、漢民族の古く此の方面より來つて黃河の流域に居るを占むるに至れるなりと云へり。「殷虛の遺物研究」(同人、東亞之光)は簡單に實地調査の結果を記せり。また昨年にありて特に研究を見たるものに遺物の化學的研究に係る「化學上より見たる支那古代の文化」(近重眞澄、史林)及び鎗石に就いて「(坪井九馬三、考古學雜誌)の二編を數ふべく、前者は化學的分析の結果より歸納せる新研究なり。支那の佛教美術に就ては、「支那佛教遺物」(松本文三郎、單行)を初め、比較的多くの研究を見たるが、中に就いて「西遊雜信」(關野貞、建築雜誌)は、特に支那内地の遺蹟遺物の調査を録せるものにして、登封、抗州の諸遺跡を記し、雲岡の佛像を論じ、婁陽寺にある南朝の石窟の北魏と同系統なるを説き、又先秦代の古瓦を紹介せるは興味を惹くこの外には昨年滿洲遼陽附近に壁畫ある古墳を發見せしことを記す可く「太子河畔の古墳」(有高巖、滿洲日々新聞)は其の構造を報じて、三國前後のものとせり。印度にては「アジアンターの石窟寺」(澤村專太郎、國華)の詳細なる調査報告を見たり。考古學一般に關しては「考古學の乘」(濱川耕作、本誌)の前年よりの結構の完結せるあり、遺物遺蹟の性質につきて、科學的考古學の採るべき研究方法を詳論せるもの、本邦に於ける此の種の最初の論著なりとす。次に考古學と關係ある諸學科の中、其の研究の特に相關聯せるものに就いて瞥見せむか、人類學の方面に於ては先に擧げたる日本人種問題に關するもの、外、「商牙の人類學的研究に就て」(富原、人類學雜誌)「ミクロネシア人種殊にトルク土人

地 理 學 界

人類學的研究補遺(平光吾一、同誌)等を數ふべく、土俗學上の研究としては「一つ物の考古學的研究」(中山太郎、考古學雜誌)「日本に於けるトテム及タプーの痕跡」(伊能嘉矩、人類學雜誌)等あり。たゞ此の方面の機關として前年發刊を見たる「土俗と傳說」の第五號を以て廢刊せるは惜むべし。金石學の分野に於ては、先づ「朝鮮金石總覽」(總督府編)を舉ぐべく、金半島、金石文を總載して、附するに拓本等に遺存せる銘文を以てせる一大資料なり。尙ほ各地の金石の調査に「武藏野の板碑に就いて」(山中笑、武藏野)「武藏國の鐘」(同人、考古學雜誌)「土佐考古誌」(武市佐市郎、土佐史壇)等あり、「續奈良縣金石年表後の金石文」(高田十郎、考古學雜誌)は同書(天沼俊一、單行)出版後發見せる遺物の記錄なり。特殊の興味ある遺物の報告としては、山城「今宮神社の四面石佛」(京都府史蹟調査報告)茨城縣結城郡開光寺に在る「福德の年號ある板碑」(橋川正、考古學雜誌)の記述及び武藏の石神井村の同じ年號ある「六地藏の板碑」(山中笑、同誌)等あり。古瓦類にては先づ「京畿地方に於ける古瓦文様の研究」(伊藤清造、同誌)の長編を舉ぐべく、文様に依りて遺物を分類して其の發達を考究せるもの「家藏瓦圖錄」(天沼俊一、單行)は其の採集に係る推古時代より明治に至る遺品一百八十餘種を圖して、古瓦沿革の一斑を示せり。其他各地の遺物の報告は一々これを舉げず。考古學上より古代土俗の問題を論ぜるものとしては「日本人の耳飾」(高橋健自、風俗究研)は是れを耳環、耳鎖、耳玉に分類し、専ら考古學上の遺物に基き、其の形式、佩用の狀を論ぜるものなり。

例によりて先づ昨年に於ける地理上の重要な事件及變動を略記せんに、五月中瓜哇ケロエト火山の爆發ありて一萬數千の生靈を奪へるは、昨年中の最大なる災害なり。政治、經濟の方面にては對獨、埃譚和條約の成立せるは各方面に劃代的の影響を與へたり獨逸は面積五千餘方里、人口約七百萬の地を失ひ、ザール炭田を佛國に奪はれたれば、ローレン鐵礦産地の喪失、海軍、商船隊の減滅、軍備の制限と相映て、軍事上是勿論、經濟上の恢復も容易ならざるべく、加ふるに此國の至寶たる上シレリアの大炭田はブレビシットに由て波蘭に屬せしめられたり。埃地利に至つてはハブスブルグ帝國の擾滅に由て、僅にアルプス東部の山地を保つ人口七百萬の小國となり、再び國際場裡に馳驅する能はず、若し夫れ、講和條約の認めたる波蘭、チエコ・スロヴァキア、セルボ・クロアチア・スロヴェニアの諸國の如きは、北方の新國芬蘭と共に、外は列強の箠制あり、内は民族的爭鬭絶えず、國歩轉困難なるものあるべし。講和條約は又獨逸より全殖民地を奪ひ海底電信網を沒收し、ライン、エルベ、オーデル、ヴィスチュラ、ニーメン、巴威ルム市以下のダニユープ川を凡て國際河川とし、キール運河をも各國商船に解放せり、想ふに歐洲の内陸水路交通系に大なる變更を惹起すべし。物故せる地理學者としては米國のギルバート氏の如き特に悼惜すべし、氏の著「地文學概論」は早く我が叢書界に紹介せられ、本邦學界の氏に負ふ所少しとせず。翻て出版の一年を回顧せんが。地形學に於てデーヴィス氏の地

理的輪廻論の盛に我が學界にもてはやされて、凡ての地貌を盡し輪廻論、準平原説を以て説明し盡さんとするは最注目に値すべし
デーヴィス氏が「自然地理學」を出し、ギルバート、サリスブリー
タール等の米國學者が相率ゐて此説を提唱してより已に二十餘年
當時獨逸派の地形學に心酔したる本邦學界は、未だ一顧だも與へ
ざりしに、今や滔々として米國派に走り、復りヒトホーフエン、
シュース、ベンク諸氏を顧る者なきが如し。

火山學、地震學並に地球物理學の方面に就ては、「信州大町地方
の地震に就て」(大森房吉、地學雜誌)は、吾人が前年度の本欄に
略報し置きたる震災に就きて、其の振動の性質を研究し、「霧島火
山」(小川亮平、同誌)は、同火山群成生の順序及び活動の狀況を記
述せるもの、「櫻島大噴火に伴へる地盤の昇降」(大森房吉、同誌)
は大正三年同火山噴火後、熔岩を多量に溢出したる爲、地盤の下
降を來したる事を説明せり。地貌、地形に關するものには、「信州
伊那の山間盆地と段丘並に天龍峽の峡谷」(辻村太郎、地質學雜誌)
「天龍川流域の地形」(同人、地學雜誌)は共に伊那盆地の地形を全
然米國流の學説にて説明したるもの、「太平洋の礁に固まれたる
島々」(同人、同誌)は太平洋中の火山島、珊瑚島の成生に關する
デーヴィス、デーナの説を譯載せるもの、「甌穴の成因及種類」(佐
藤傳藏、同誌)は急流の河底に生ずる圓穴即ち甌穴の出來方を説
明し、「丹波絶岡盆地の斷層地形」(辻村太郎、歴史と地理)は、同盆
地の成生を以て、斷層に歸因すとなし、保津川峡谷は同盆地の隆
起による保津川の回春に基く説明し、「列車中より觀たる地形」
同人、同誌)は著者が東海道線、北陸線より、信越線、中央線な

經由して東京に歸還するまでの汽車中より觀たる地形を、デーザ
イス流に説明したるもの、「熔岩流の表はす地貌」(同人、同誌)は
各地火山に於ける熔岩流の地形を述べたり。湖沼學に於ては先づ
「諏訪湖の研究」(山中阿歌麿)の完成を特筆すべし、北海道の火山
湖(田中館秀三、地學雜誌)は、北海道に多き火山性の湖につき、
其の湖沼學的性質を研究したり。氣候學方面にて「歐洲戰場と氣
候」(中目覺、史料)は、歐洲の東西戰線に於て、氣候が戰爭に如
何に影響したるかを論ぜり。人文地理學方面にて、「聚落の研究」
(西龜正夫、歴史と地理)は聚落の成生する原因を述べ、「西比利
亞土着民の狀況」(井染祿郎、地學研究)は西比利亞土人の現狀を
叙したるものなり。經濟地理の方面にては、大戰に刺激せられて
經濟的資源、動力、工業原料、食料等の分布、需給、生産に關す
る研究の著しく顯著なるは喜ぶべき現象なり。「滿蒙の大勢」(南
滿洲鐵道會社)は人口及耕地の點より、滿洲、東部内蒙古に於け
る將來の人口収容力、生産力、食料輸出力を統計的に示し、幾多
の圖版を添へ、「歐洲戰場に於ける鐵產地領有の戰局に及ぼせる影
響」(井上壽之助、地學雜誌)は、前年より引き続き、歐洲の東部、
西部の戰線に於ける鐵、石炭、石油の賦存狀況、並に兩交戰團體
が如何に之等戰時必需品產地の領有に腐心せるかを論じ、「戰爭前
に於ける露國の鐵及石炭」(松野寛治、同誌)は露國に於ける鐵、
石炭の分布及び製鐵業の狀況を叙述し、「千九百十七年の南亞聯邦
鐵產額」(同人、同誌)は、同年南亞鐵產の大宗たる金が、勞力不
足の爲に產額を減じ、金剛石は、生産制限による價格騰貴の爲に
却て金價額に於て増加し石炭が獨逸潛航艇の地中海横行による航

路變更の爲に、船用炭として盛に輸出せられし狀況を述べ、「南北兩米に於ける水産物需要狀況」(小川清一、同誌)は、北米に於ける水産物生産の狀況及び維典亞米利加に於ける其の需要狀況を記し、「支那蠶絲業」(芳賀權三郎、同誌)は、支那の上海、廣東及び四川地方の蠶絲業の狀況を視察して、支那の斯業は尙幼稚なれども、土地の廣大なるを、阿片の栽培禁止により、阿片耕地の桑園に變ずるもの多きにより、將來本邦の勁敵たるべしと斷じ、「羊毛の需給に就て」(月田藤三郎、同誌)は、世界に於ける羊の分布を論じ、日本の需要狀況に及び、「米の問題」(遠藤金英、歴史と地理)は日本に於ける米の生産、需要の狀況を略説し、「土地と人文」(同人、同誌)は著者が北陸地方旅行の見聞録とも見るべく、「戰時中に於ける我工業の發達」(小西正二、地學雜誌)は、戰時中本邦工業發達の狀況を統計的に記述せり。交通の方面にては、「亞弗利加大陸の脊梁骨と交通系」(小林房太郎、同誌)は主として東部亞弗利加の交通系の將來を論じたる翻譯物なり、「海運に就て」(宮崎清則、同誌)は、大戦以來の國際汽航競争の狀況を述べ、「西比利亞の河川と北極海との連絡航路」(内田寛一、史林)は、西比利亞の内陸水路網の狀況を敘述し、「航空術に就て」(和田秀穂、地學雜誌)は、純軍事上より進んで速達交通機關として利用せられ、隨て交通地理の對象たらんとしつゝ、ある航空機の理論を述べたり「太平洋の交通」(下田禮佐、歴史と地理)は太平洋に於ける探検交通の狀況を述べ、「日本を中心とする世界」(遠藤金英、同誌)は日本の交通上の地位を述べたり。地誌に關するものには、「西比利亞の土地と住民」(文部省)は西比利亞の地形、産業、交通、住民等

の狀況を述べ、鮮明なる地圖二葉を添へたり、「朝鮮地誌資料」(朝鮮總督府)は選に紹介したるが如く、一の統計に過ぎざるも、朝鮮地積調査の重要な副産物と云ふべく、「アルサス・ロルレーヌ」(下田禮佐、歴史と地理)は、久しく獨佛間の問題とされる同州が佛國の國防上重要な地域たるを、世界稀有の鐵礦產地たるをによりて兩國間の争點とされるを述べ、「南米貿易」(西田典四郎、同誌)は主として南米の亞爾然丁、伯利西爾、智利(A、B、C)三國の貿易の狀況を述べ、「英領ニューギニアに就て」(金原信泰、地學雜誌)は同島の一般地理を記し、「山東省瞥見記」(佐藤傳藏、同誌)は同地の見聞録を載せ、「南洋新占領島の現況」(根本重治、同誌)も南洋の元獨領諸島の概況を通俗的に録したるものなり。英領ボルネオ島の一瞥(野田勢次郎、同誌)は元と同島の地文地質を論じ、バルカン半島の文化の分布(小林房太郎、同誌)は、同半島の文化が、民族の移住混合によりて如何に複雜とされるかを記せり。其他統計、案内記類には最近朝鮮事情要覽(朝鮮總督府)、臺灣事情(臺灣總督府)、北支那貿易年表(南滿洲鐵道會社)等注目すべきものなるべし。(下田)

彙報

● 地方史誌編纂概況の調査

京都帝國大學文學部國史研究室に於ては茲に地方史研究の資料として府縣郡市町村等に於ける歴史編纂の狀況を取調べ地方史書